



日本統計学会 会報 2025.10.31 No. 205

発行——一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
公益財団法人 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任——青嶋 誠(理事長) / 坂田 綾香(庶務理事)
朝日 弓未(広報理事) / 田島 友祐(広報委員)
趙 宇(広報委員)
振替口座—00110-3-743886
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

- | | |
|----------------------------|--|
| 1. 巻頭随筆：統計学は終わったか……松田安昌… 1 | 2.7 第39回小川研究奨励賞 |
| 2. 統計学会各賞受賞者のことば | ……………石原卓弥…16 |
| 2.1 第30回日本統計学会賞 | ……………仲北祥悟…17 |
| ……………南美穂子… 3 | ……………奥戸道子…17 |
| ……………西山慶彦… 3 | ……………藤森 洸…18 |
| ……………藤澤洋徳… 4 | 2.8 第4回 ISI 東京記念奨励賞 |
| 2.2 第5回日本統計学会中村隆英賞 | ……………樋口知之…19 |
| ……………川崎 茂… 5 | ……………佐川凜華…19 |
| ……………長岡貞男… 6 | ……………澤谷一磨…20 |
| ……………国友直人… 7 | ……………平木大智…20 |
| 2.3 第21回日本統計学会統計活動賞 | ……………山崎遼也…21 |
| ……………中間栄治・岡田昌史（共同受賞）… 8 | ……………屋良淳朝…22 |
| 2.4 第21回日本統計学会統計教育賞 | 3. 第8回細谷賞の公募 ……………松田安昌…23 |
| ……………独立行政法人統計センター…10 | 4. 理事会・委員会報告（2025年7月26日開催）…24 |
| ……………新井 仁…11 | 5. 2025年役員・代議員協議会記録…26 |
| 2.5 第19回日本統計学会研究業績賞 | 6. 博士論文・修士論文の紹介…26 |
| ……………柳 貴英…11 | 7. JSS Research Series in Statistics からの新刊情報 |
| ……………清水泰隆…12 | ……………27 |
| 2.6 第18回日本統計学会出版賞 | 8. 学会事務局から…27 |
| ……………滋賀大学データサイエンス学部…14 | 9. 投稿のお願い…28 |
| ……………鎌倉稔成氏・共立出版（共同受賞）…14 | |

1. 統計学は終わったか

松田 安昌（東北大学大学院経済学研究科）

二〇二四年、Google DeepMind が Nature に発表した生成型 AI モデル GenCast は、気象の世界に大きな驚きをもたらした。これまで物理法則を数値的に解いてきた気象モデルを、予測精度でも計算速度でも上回ったのである。過去の観測データだけを学習し、将来の大気の状態を生成する。しかも、スーパーコンピュータが数時間を要する計

算を、わずか数分で終えてしまう。理論を積み上げて未来を解く時代から、データそのものが未来を語る時代へ——天気予報もデータサイエンスの対象となりつつある。

この変化の背景には、近年の AI 技術のめざましい発展がある。画像認識では畳み込みニューラルネットワーク（CNN）が人間の視覚を超える精

度を実現し、テキスト分析では Transformer によって文脈を理解するモデルが登場した。画像やテキストは扱いが難しく、確率変数の実現値をデータとみなす統計学の伝統のもとでは、分析対象とすることが難しかった。二〇〇〇年ごろに「ビッグデータ分析」という言葉が広まると、コンピュータサイエンスがこの領域に参入し、数値データ中心の世界から画像やテキストの分析へと対象を広げた。理論を頭の中で構築する時代から、データに語らせるデータ駆動型の分析へ——その転換は時代を大きく動かした。

私自身がこれまで研究の対象としてきたのは、主として数値データであった。しかし、統計学がデータサイエンスと呼ばれるようになってから、いくつかの変化を強く感じている。第一に、推測統計が前提としてきた小標本・漸近理論の世界から、ビッグデータや有限理論を扱う世界へと変わったことである。それに伴い、確率論や測度論がもつ意味も、以前とは異なるものになりつつある。第二に、コンピュータサイエンスによる方法には、統計学にはない優れた特徴がある。ディープラーニングモデルは、数億にも及ぶ巨大なパラメータ数と最適化の困難さから、かつては実効的

なモデルとは考えにくかった。確率勾配降下法とミニバッチ学習は、ローカルミニマムに陥って計算が止まる問題を克服し、膨大なパラメータの最適化を現実のものとした。私はこれまでニュートン法とヘッセ行列による最適化を当たり前と考えてきたが、微分情報だけで学習を進める勾配降下法には、すっかりその軍門にくだった感がある。

自分のキャリアの終わりを意識するようになってから、統計学者としてどのように貢献できるかを考えることが多くなった。モデルを決定論的にとらえる現代のデータサイエンスには、不確実性の視点が十分に組み込まれていないように思う。その点で、統計学者が果たせる役割は小さくないはずだ。最近、Google DeepMind の GenCast に触発され、気象変数のビッグデータ分析に取り組み始めている。GenCast のような大規模モデルは、個人の研究者が追試できる規模をはるかに超えている。それでも、時系列解析の伝統で培われた VAR モデルや因子モデルの要素を、現代的なディープラーニングの中に取り込み、不確実性を考慮した統計学者らしいモデルを構想できないか——そんなことを考えている。統計学はまだ終わっていない。

2. 統計学会各賞受賞者のことば

2025年9月10日、統計関連学会連合大会において、日本統計学会各賞の表彰式がありました。日本統計学会各賞の受賞者のみなさまから、受賞のことばを頂きましたので、以下の順にご紹介致します。

- ・第30回日本統計学会賞：南美穂子氏、西山慶彦氏、藤澤洋徳氏
- ・第5回日本統計学会中村隆英賞：川崎茂氏、長岡貞男氏、国友直人氏
- ・第21回日本統計学会統計活動賞：中間栄治氏・岡田昌史氏（共同受賞）
- ・第21回日本統計学会統計教育賞：独立行政法

人統計センター、新井仁氏

- ・第19回日本統計学会研究業績賞：柳貴英氏、清水泰隆氏
- ・第18回日本統計学会出版賞：滋賀大学データサイエンス学部『この1冊ですべてわかるデータサイエンスの基本』、鎌倉稔成氏・共立出版（共同受賞）『統計学 One Point シリーズ』
- ・第39回日本統計学会小川研究奨励賞：石原卓弥氏、仲北祥悟氏、奥戸道子氏、藤森洸氏
- ・第3回 ISI 東京大会記念奨励賞：佐川凜華氏、澤谷一磨氏、平木大智氏、山崎遼也氏、屋良淳朝氏

2.1 第30回日本統計学会賞

受賞のことは

南 美穂子（慶應義塾大学名誉教授）



このたびは榮譽ある日本統計学会賞をいただきまして大変光榮に存じます。推薦いただいた皆様、選考委員会の皆様、会長・理事長・関係の皆様、今までご指導いただいた多くの皆様

に心より御礼申し上げます。

私の統計学との出会いは、学部卒業後、1982年に就職した日本ユニパック株式会社に経営科学課に配属されたときです。分布関数・分位点関数、検定、回帰分析などの、米国本社が作成した100余りのFortranルーチンが何をどのように計算しているかを理解することが初年度の主な仕事でした。効率良い勉強法とは言えませんが、これが自分の礎となったと今では思います。また、先輩方にアルゴリズム論などの輪読会で指導していただいたこと、日科技連の多変量解析研究会に参加させていただいたことなど、お世話になった皆様に深く感謝しています。

恵まれた職場でしたが、統計学の理解もソフトウェアの知識も中途半端であるように感じ、1988年にカリフォルニア大学サンディエゴ校大学院に入りました。知識を得るための「もどかしさ」からの解放感が大きく、数学部の他にも経済学部のEngle/Granger先生の講義や様々な分野の研究者が議論しあう認知科学部でのニューラルネットセミナーに出るなど物見遊山のような修士課程を経て、1990年に博士課程に転籍しました。学位論文はIan Abramson教授の指導の下、同時応答成長曲線モデルにおける分散推定に関してREML推定量などの議論をまとめました。

学位を取得しても研究者になれるとは思っていませんでしたが、帰国後に訪問した柴田里程先生、大橋靖雄先生に考えてはどうかとアドバイスをいただき、1995年4月に東京理科大学理学部応用数学科に助手として採用されました。清水邦夫

先生にご指導いただいてREML推定法に関連した複数の共著論文を出すことができ、また渋谷政昭先生と清水先生に紹介いただいたLagrange分布族の研究では分布の逆関係を用いた収束の議論や多変量への拡張など、鉛筆を走らせて知らなかった世界が開けていく面白さを楽しみました。

5年任期の4年目で出産をしました。この先の就職は難しいかもしれないと思っていたところ、産休明け直前に1999年4月から統計数理研究所に准教授として採用するとの連絡がありました。統計数理研究所では、分布論の研究と併行して頑健な独立成分分析の共同研究を江口真透先生と行い、また、修士課程で同じ授業を取った全米熱帯マクロ類委員会のCleridy E. Lennert-Cody博士と海洋生物資源評価に関する共同研究を始めました。既存モデルでは対応できない現実の問題を解くことはとても興味深く、また、利害の異なる立場の相手に統計モデルを用いて説明することの意義を改めて認識できました。

2009年度からは慶應義塾大学理工学部数理科学科に教授として務めました。研究指導・研究室運営には戸惑うこともありましたが、学生の皆さん、同僚の教員の皆様に助けられ、研究の刺激も沢山もらって16年間の充実した教員生活を送ることができたことは大変有難く、皆様に心より感謝しています。

志を持って研究者を目指した訳でもなく、また、当初は学会には身寄りがないように思っていた自分が、多くの方に日本統計学会賞に推薦していただき受賞できるとは思っていませんでした。振り返ってみると多くの先輩方に貴重なアドバイスをやご指導をいただき、若い方々にも様々な刺激や助けをいただいていることを改めて強く感じ、感謝の念に堪えません。皆様、誠に有難うございました。

受賞のことは

西山 慶彦（京都大学経済研究所）

このたびは、栄えある日本統計学会賞を賜り、誠に光榮に存じます。長年にわたり国際水準で統



計学の発展に尽力されてきた過去の受賞者の諸先生方の足跡を思うと、身の引き締まる思いであります。

これまで私は主としてノンパラメトリック、セミパラメトリック法の漸近論、

特に高次漸近理論の研究をして参りました。大学院生時代には京都大学で森棟公夫先生に、そしてロンドン大学では Peter Robinson 先生には指導教員として基礎的なトレーニングを積み機会を頂きました。森棟先生は同次方程式モデルの推定や統計的推測における一次、高次漸近理論の専門家であり、Robinson 先生は当時ノンパラメトリック、セミパラメトリック法の研究を行っておられ、お二人に学んだことが私の研究テーマを決めました。その後は共同研究者や同僚、学生の皆さんに恵まれ、学びを得て、それ以外の色々なテーマにもチャレンジしながらゆっくりと研究を進めて参りました。その上で、統計関連学会連合大会をはじめとして国際、国内学会、セミナー・研究会の活動を通じて得られた多くの刺激的な交流は、私の研究を深めるために欠かせないものでした。

ノン、セミパラ研究は最新の研究テーマである機械学習とも親和性が高く、似た側面があるわけですが、違いも大きく、特にバイアスと分散にはトレードオフがあるものと信じて疑わなかった私にとって、double decent といった現象の発見はショッキングであり、また統計分析の奥深さを思い知らされるものでした。これを一例として未知の現象について、これからは計量経済学、統計学の理論的な側面を中心に研究を進めたいと考えております。

もう15年近く前になりますが、統計関連学会連合大会の関係者のある先生から、計量経済学の人たちはなぜ漸近論に拘った古典的なアプローチで研究を行っているのか？と言われたことがありました。提案手法が機能するかどうかは、数値実験などで調べることにして、むしろモデリングや新しい統計手法の開発といったところに注力する方

が生産的ではないかという趣旨でした。その流れは昨今、手法の理論的な基礎付けはともかく現実のデータの解析に役立つ手法を開発していくというスタイルの統計学研究の最前線であり、その成果はまさに産業革命、社会革命をもたらしており、大変素晴らしいと考えています。当時は、その先生のご意見をなるほどもっともだと思って伺っておりましたが、他方で、特に最近になって漸近理論にもいわば古典芸能にも通ずる重要性があるのではないかという思いが沸いてきております。互いに補完しあいながら優れた統計分析につながる研究を進めるべく、今後も実証面にも気を配りつつ統計学、計量経済学の理論的深化のため、より一層の研鑽を積み、微力ながら学術の発展に貢献して参りたいと存じます。同時に、次世代の研究者が自由闊達に失敗を恐れず新しい研究テーマにチャレンジし、統計学の新たな地平を探り、議論していける場を醸成することにも貢献できるよう努力したいと考えております。

最後になりますが、本賞の選考にあたり推薦等でご尽力くださった先生方並びに選考委員の皆さま、そしてこれまで私の研究を支えて下さった共同研究者、同僚の先生方、学生諸氏、そして事務方や秘書の皆様にご心より感謝申し上げます。

受賞のことは

藤澤 洋徳（統計数理研究所）



このたび栄えある日本統計学会賞を賜り、身に余る光栄に存じます。これまで多方面から温かく支えてくださった多くの皆様に、心より深く感謝申し上げます。皆様のご支援なくして、このような栄誉にあずかることは決して叶わなかったと、改めて痛感しております。推薦にお力添えくださった先生方、そして選考委員の先生方にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

私は小さい頃から学校の先生になることを夢見ておりました。大学時代には高校教員の採用試験

を受け、結果的に修士課程へと進んだのも、当時想定されていた教員免許制度の改革に備えたものでした。研究者という道は、その時点ではまだ視野にありませんでした。博士課程に進学する少し前から研究に関心を持ち始め、論文を書き始めたものの、「研究とは本当は何なのだろうか」という問いを抱え続けていました。

東工大に助手として着任した後も、自分はこのままでは十分に研究を深められないという思いがありました。自分の歩みを一度立ち止まって見直す時間が必要だと考え、まずは次の職を得るのに困らぬ程度まで研究業績を積み、その上で博士課程時代から憧れていた甘利俊一先生のレクチャーノート“Differential-Geometrical Methods in Statistics”にじっくり取り組みました。そこで初めて、研究の流れが自然に展開されていくことの美しさを心から実感したのです。続いて赤池弘次先生の若手向け講演を拝聴する機会に恵まれ、現場のデータに動機を得た躍動感ある研究の進め方に深い感銘を受けました。これこそ私が理想的だと思い描いていた統計科学だと思いました。この頃が私の研究者としての本当の出発点だったと思います。非常に遅い出発でした。

その後、統計数理研究所に異動し、江口真透先生から多くを学びました。江口先生は情報幾何に精通され現場データ対応への意識も高く、統計科学をその枠外から俯瞰する視点を教えてくださいました。私の代表的研究である「ガンマ・ダイバージェンスに基づくロバスト統計」は、現場データに大量の外れ値が含まれる状況への対応という実務的動機から出発し、情報幾何で培った自然な論理とダイバージェンスの感覚を基盤として数理を構築したものです。甘利先生・赤池先生・江口先生から学んだことが、この研究を支える大きな柱となりました。

ちょうどこの研究を進めていた時期、ゲノムデータ解析が一大潮流となり、実データに動機を得た研究に本格的に取り組みました。ガンマ・ダイバージェンスの拡張では金森敬文先生と、スパース・モデリングでは川野秀一先生と共同研究

を始め、多くの若手研究者を巻き込みながら議論を深めました。その後、データサイエンスの潮流とともに企業との共同研究も広がり、東芝との取り組みでは株主向け技術戦略説明会や日経ロパティクスで成果が紹介されるなど、数理系研究者として貴重な経験を重ねることができました。

博士課程の学生も次第に増え、これまでに7名が博士号を取得しました。教育に強い関心を持つ私にとって、これは大きな喜びでした。学生一人ひとりが私にない多様な特質を持ち、その学びから私自身も大きく成長させてもらいました。また、社会人学生の研究はまさに現場データに動機を得たものであり、日々新たな刺激を受け続けています。

最後に、私より少し年下の研究仲間である二宮嘉行先生・柳原宏和先生に深く感謝申し上げます。研究だけでなく、プライベートなことも気軽に語り合えるお二人の存在は、私の研究者人生における最大の幸運の一つでした。



授賞式の様子：左より、青嶋誠理事長、南美穂子氏、西山慶彦氏、藤澤洋徳氏、狩野裕会長

2.2 第5回日本統計学会中村隆英賞

受賞のことば

川崎 茂（一般財団法人日本統計協会）

このたびは、日本統計学会中村隆英賞を授与いただき誠にありがとうございます。ご高名な中村隆英先生のお名前を冠した賞をいただき、大変光栄に存じます。推薦者、選考委員を始め、お世話くださいました皆様に心よりお礼申し上げます。

私は1975年（昭和50年）に総理府統計局（現在



の総務省統計局)に就職したのを出発点として、公的統計の様々な仕事に携わってきました。就職後の早い時期に国連統計局に出向したことは私の職業人生に大きな影響を与えてくれました。

国連では、国連とペンシルバニア大学の共同研究プロジェクトであるICP(国際比較プロジェクト)で購買力平価の統計の開発に携わりました。上司は同大学のAlan Heston教授であり、自由闊達に議論しながら仕事をすることができました。この仕事を通じて国連や各国の統計関係者に知遇を得ることができ、国際的な活動に携わるようになりました。また、いただいた肩書がAssociate Statisticianだったおかげで、自分はStatisticianであるとの自覚が生まれ、それ以来、自己紹介ではStatisticianであると称するようになりました。

このような経験を含め、私は職業人生を通じて職場の優れた先輩・上司から貴重なご指導をいただきました。中でも、「指導教官」とも言えるのは永山貞則先生と三浦由己先生(いずれも故人)です。お二人とも日本統計学会賞を受賞されました。また、三浦先生は日本統計学会会長を務められ、私にとってロールモデルのような方です。統計局で自己研鑽が奨励され、大変勉強することができ、ありがたい環境に感謝しています。そのような中、私は1990年ごろには日本統計学会やISI(国際統計協会)などに入会しました。学会を通じて優れた研究者の方々と交流することができ、私は大変よい刺激をいただきました。

2005年から2007年にかけて勧められた政府の統計制度改革では、いわゆる吉川委員会(委員長:吉川洋先生)が開催され、私はその事務局長を務めました。委員会では松田芳郎先生(故人)、美添泰人先生、舟岡史雄先生を始め、日本統計学会等の先生方に大変お世話になりました。委員会の議論を踏まえ、2007年5月には統計法の全面改正にこぎつけることができ、関係された皆様に感謝しています。

公務員を退官後、日本大学経済学部で10年間勤務しました。その間も国内・海外の学会の活動にも携わり、多くの優れた研究者・実務家の方々と交流することができたのは大変ありがたい経験でした。

私がこれまで携わってきた公的統計では、チームワークで仕事をするのが基本ですので、この度いただいた賞は私個人だけに対するものではなく、私が所属した組織に対するものでもあると考えております。この機会に、私を導き、支えてくださった総務省統計局を始めとする職場の先輩・同僚の皆様に感謝申し上げたいと思います。

私は現在、一般財団法人日本統計協会の理事長を務めており、最も力を入れているのは月刊誌『統計』の企画・編集です。この雑誌により、より多くの人が統計に親しみ、理解を深めていただき、それを通じて統計と社会の結び付きを強めることができるよう少しでもお役に立つことができたらと考えております。この雑誌には、これまで多くの優れた先生方から貴重な原稿をいただいております。今後皆様にご執筆などご協力を仰ぐこともあると思いますが、その節はどうぞよろしくお願いいたします。

結びに、日本統計学会及び統計関連学会の皆様のみますますのご発展とご健勝を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。

受賞のことは

長岡 貞男(一橋大学名誉教授)



この度日本統計学会中村隆英賞を頂くことになり、身に余る光栄です。推薦の労をとって頂いた先生の方々、審査を担当して頂いた先生の方々、そして本賞を創設された関係者の方に深く感謝を申し上げます。

わたくしはイノベーションの経済分析を主たる専門領域としてきました。現在ではイノベーションは経済学においても最も重要な研究分野の一つ

となっており、多くの学者が研究を行っています。しかし、私が米国のMITの大学院で経済学を学んでいた時期では、マクロ経済学の中心は失業とインフレであり、経済成長の分析においても資本蓄積がその中心であり技術進歩は外生的な要因として取り扱われていました。ちなみに、中村隆英先生の名著「昭和史」においても、3回言及されている「技術革新」は設備投資の一要因として議論されているのみです。ミクロ経済学でも、競争的な市場経済の効率性の分析が中心で、技術進歩は与件とされることが通例でした。

その後、ロバート・ソロー教授の先駆的な統計的な研究等によって、技術進歩が経済成長に果たす役割の認識が高まり、加えて経済誘因によって技術進歩の速度と方向性が強く左右されるという認識が強くなり、世界的に技術進歩やイノベーションの学術研究が急速に拡大してきました。私もその流れの中で、イノベーションの研究を進めて参りました。例えば、発明の分野では、発明の創造過程における不確実性、発明者へのインセンティブ設計、反共有地の悲劇、特許制度のパブリック・ドメインへの貢献、特許審査制度等です。

こうした研究を進める上では、知識の創造と活用の実態を把握できるミクロデータが必要ですが、特許庁の業務データの研究用データとしての整備、知的財産についての公的統計の整備の進展に大きく助けられました。私もそれを補完する発明者サーベイなども実施してきました。私が利用してきた統計的な手法は、統計学の先端から見ますと、初歩的な道具ですが、その進歩と普及によって大きな恩恵を受けてきております。

最後に、名誉ある日本統計学会中村隆英賞を授与して頂きましたことに改めて感謝申し上げます。本学会の発展を祈念するとともに、受賞を励みとして、私も研究を進めていく所存です。

受賞のことば

国友 直人（統計数理研究所・特任教授）



この度は中村隆英賞の受賞という荣誉に接し、賞に推薦して下さった方々、審査にあたられた方々など、ご関係の皆様へ感謝申し上げます。

統計学について何も知らなかった大学1年生だった私がたまたま受講したのが（故）中村隆英先生が担当された「（文系の為の）統計学」だったことを思い出します。「文系の…」といっても確か中心極限定理について積率母関数を利用して証明され、数IIIを履修してなかった私が指数関数を理解するきっかけとなったことが今でも鮮明な記憶です。中村先生の本業は明治以降の現代日本経済史ですが、当時は主流のイデオロギー的な経済史学に対しデータを重視した現代経済史の研究を精力的に進められていました。また大学で統計学を教えているとともに統計委員会の仕事を始め、日本の公的統計の整備に活躍されていたことを後で知りました。

私の方は研究者としては計量経済学、計量ファイナンスなどでの統計的理論と応用に主な関心がありましたが、中村先生からの影響もあり経済統計、公的統計についても関心を持ち続けていました。特に新聞・TV・ネットなどで話題になることが多い公的統計の多くは統計的に処理された季節調整済系列であることに気がなっていました。我々がメディアの報道を通じて経済活動の判断材料としている公的データの多くは統計的時系列モデリングの結果であり、その真実性は自明ではないことに気が付く人々や統計家は今でもそれほど多くはないようです。X-12-ARIMA というセンサス局で開発された季節調整法はその名の通り、統計的時系列ARIMAモデルを利用するなど統計処理を行います。公表されている数値は我々が知りたい真の系列とは限らないのです。他方、幾つかの理由からエコノミスト、役所の一部では「米国センサス局が開発した優れたものなので利用す

べき」という態度もかなり浸透しています。統計数理研究所では（故）赤池弘次先生・石黒真木夫先生が開発したBAYSEA、北川源四郎先生が開発したDECOMPなど優れた性能を持つ季節性の分析法があり、そうした学問的な伝統を日々の難しい公的統計実務に生かすべき、というのが私の立場です。日本の役所の担当者は日々の業務に追われ、通常は発表したデータは誤差がないものと理解され、過去に遡って修正することなどはかなり困難です。こうした状況は統計家の出番であるとともに、統計家が考える理論通りにはいかな現実の運用事情も理解すべきとは思われますが、私にはGDP統計や法人企業統計などについて助言する機会が何度もありました。翻って、実は公的データを作成している当事者と議論すると統計的時系列分析の教科書に書かれていない様々な統計的問題に遭遇することになり、統計学的角度からあらたな統計分析の可能性を考えるきっかけになっています。先日の連合大会では佐藤整尚先生（東京大学経済学部）と共同で非定常季節経済時系列の周波数領域での分解法¹⁾、季節調整法SarSIML²⁾（）、直近の変化点の検出方法の研究報告を行いました。

実際に観察する経済統計や公的統計などでは今でも統計学的にも様々な困難な問題があります。公的統計は広く国民に客観的情報を提供するという民主主義国家において重要な役割がありますが、回収率の低下問題などを始め理論と応用の両



授賞式の様子：左より、青嶋誠理事長、川崎茂氏、国友直人氏、長岡貞男氏、狩野裕会長

面でお検討するに値する様々な問題があると考えています。中村隆英賞の受賞を一つの契機として今後ますます研究を重ねていきたいと希望しています。

1) <https://link.springer.com/book/10.1007/978-981-96-0882-9>

2) <https://stat-expert.ism.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2024/11/SSE-DP-2024-4.pdf>

2.3 第21回日本統計学会統計活動賞 受賞のことは

中間 栄治

（株式会社金沢エンジニアリングシステムズ）



このたびは、日本統計学会活動賞という栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。

本賞の選考にご尽力いただいた皆様には、さまざまなお手数をおかけしました

こと、心より御礼申し上げます。

今から20年以上前、インターネットがまだ人と人の牧歌的なつながりを育てていた時代に、今回共同受賞された岡田氏が運営されているRjpWikiにて、Rで日本語を扱えるようにするためのパッチを投稿し始めたことが、私の活動の端緒となりました。

当初、パッチをダウンロードしてくださった方は6名ほどでしたが、徐々に利用者が増えていったことを今でも鮮明に覚えております。

この活動を継続できたのは、初期のRjpWikiの参加者の皆様、そして家族の理解と支えがあったからであり、深く感謝しております。

その後、Rのコアメンバーより、これらの作業を取り込みたいとの申し出があり、特にブライアン・リプリー氏とポール・マレル氏には、言語処理の部分をご考案・実装いただき、今日のRにはその成果が受け継がれております。

コアメンバーとのやりとりの中で印象深かったのは、「漢数字はサポートしなくてよいのか？」

という問いと、「日本語の組版の要件（縦書きなど）」に関する議論でした。前者は必須ではないとお伝えしましたが、後者については日本語組版の説明に非常に苦勞した記憶があります。縦書きについてはデバイス依存するので見送る事にしましたが、非常に好意的に対応していただきました。現在では W3C に「日本語組版処理の要件」が整備されており、当時に比べれば説明も容易になりましたが、当時は、ケン・ルンデ氏による日本語情報処理の文献以外に参考資料が乏しく、説明には大きな困難を伴いました。

このような活動が可能であったのも、R が著名な自由ソフトウェアであり、ライセンスに従えば自由に改変・公開できる前提だったからこそです。仮に他のライセンスであれば、たとえソースを公開してもバイナリが同じものかも疑われてそれで検定しても恐らく結果を疑われた事でしょう。実際熱狂的な R ユーザには R のバグなのにバグではないと R を信じて疑わない方もいました（このときのバグフィックスのパッチはメインストリームに投げました）。

何より、多言語化に限らず、実装の詳細や工夫を共有できたことは、私にとって非常に楽しく、意義深い経験でした。今後も統計学と計算機科学の発展を楽しみにしております。

受賞のことば

岡田 昌史

（新医療リアルワールドデータ研究機構株式会社）



このたびは統計活動賞をいただきありがとうございます。

私は病気の発生率などを調査研究する疫学という分野をやっております。10 年ぐらいまでは筑波大学で研究をしておりましたが、現在は民間企業で企業が行う研究のお手伝いをしております。

R 言語については、相応早くから使っておりまして、2000 年前後から使っておりましたが、当時

はもちろん情報はほとんどありませんでした。S 言語に近いものですから、柴田先生の S の教科書などで勉強しながら、当時大学で学生にも関わらず unix サーバの管理を任されておりました立場を利用し、日本語で R の相談ができるメーリングリストを開設しました。そこに日本で R を使う皆様が集まって議論いただけるようになり、その流れで 2003 年ごろに、当時流行っておりました Wiki という誰でも自由に編集ができる Web システムとして、RjpWiki というサイトを立ち上げました。実はこれは今でも運用していますが、いろいろ貴重な記事を多くの皆様に書いていただいで、R を習得するための情報源としてお役に立てたと思います。その後、RjpWiki にお集まりいただいた先生方のご協力で日本語の書籍を出版したり、医学部で自分がもっておりました統計学実習でできるように教科書を翻訳するなどをしてまいりました。みなさまご承知のとおり、2010 年代の R の普及は驚異的であり、R ユーザーの国際会議 (UseR!) も毎年開かれるようになりました。2016 年の UseR! には参加する機会を得て、TeX の Knuth 先生が R Markdown 文書を書かれるという講演を拝見しました。会場もすごい盛り上がりで、R が世界中で普及していることをあらためて体感しました。

しかし、私自身が R を使い始めた動機としては非常に単純でして、当時統計パッケージを使えるパソコンは、ライセンスが高価だったこともあり、研究室に 1 - 2 台ぐらいしかありませんでした。私は怠け者ですので、なんとか研究室に行かなくても自宅のパソコンで分析ができないかな、と思い、フリーソフトウェアの統計アプリを探して R に辿り着いたというわけです。しかし、この、誰でもいつでも統計処理ができる、というところが大変重要であったのではないかと思います。統計というものは本来、世の中の仕組みを理解するために汎用的に使える技術であると思いますが、R が普及したことではじめて、勉強さえすれば世界中の誰でも統計ができる、という状況になったのだと思います。

これまでRの普及をやってきて、この、誰でも気軽に統計ができる、という環境を作るために少しでも貢献できたのかなと思いますと、大変嬉しく思います。



授賞式の様子：左より、狩野裕会長，中間栄治氏・岡田昌史氏

2.4 第21回日本統計学会統計教育賞 受賞のことは

飯島 信也（独立行政法人統計センター）



このたび、統計センターが日本統計学会統計教育賞を頂いたことは、大変名誉なことであり、推薦・選考をはじめ賞に関係された皆様方に心から御礼を申し上げます。

統計センターでは、2018年度から、統計リテラシー向上のための2つの取り組みとして、教育用標準データセット（SSDSE）の作成・提供と、統計データ分析コンペティションの開催を続けてまいりました。これらの取り組みは、開始当時に統計センターの理事長でいらした椿広計先生（統計数理研究所）が、アイデアを提唱されスタートしたものです。私自身も開始当初から担当者の一人として、先生の強いリーダーシップのもとでご指導を頂きながら、取り組みを進めてまいりました。今回、これらの2つの取り組みが、統計教育に資する活動として評価されましたことは、統計センターにとりまして大変栄誉あることです。この場を借りまして、椿広計先生に心から感謝を申し上げます。

2つの取り組みは今年度で8年目を迎えておりますが、おかげさまで、利用・参加が拡大を続けております。SSDSEについては、現在6種類のデータセットを提供中ですが、ダウンロードの件数は毎年着実に増え続けて、昨年度は1年間に約21万件で、今年度もそれを大幅に上回る件数となっています。また、統計データ分析コンペティションについては、応募件数が毎年増加しております。第8回の今年度も9月3日に応募を締め切り、多数の応募論文の中から、厳正な審査を経て、10月20日に受賞論文を公表いたしました。

ここまで取り組みを続けることができましたのは、コンペティションの共催者である、総務省統計局、統計数理研究所、日本統計協会や、コンペティションの審査にご協力いただいている先生方、さらに、これまでコンペティションに参加いただいた皆様、また、SSDSEをご利用いただいている皆様方のおかげであり、改めて感謝を申し上げます。

統計センターは、公的統計の基盤を担う専門的組織で、業務の中で一番大きなウエイトがありますのは、総務省統計局が所管する基本統計の集計・編成業務です。本年10月1日には5年に一度の国勢調査が実施されますが、インターネットや紙の調査票でご回答いただいた内容は、すべて統計センターに集められ、速やかに集計を行う準備を進めております。

このような集計業務のほか、公的統計を支える基盤の提供業務（e-Stat、jSTAT MAP、政府統計共同利用システムの運用管理など）、公的統計の二次的利用サービス提供業務（オンサイト利用による調査票情報の提供、オーダーメード集計、匿名データの作成・提供など）、さらに統計教育への支援などの業務を行っております。

今後も引き続き、統計教育への支援、統計リテラシー向上のため、SSDSEと統計データ分析コンペティションを継続し、より良いものにしていきたいと考えております。引き続きのご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

受賞のことは

新井 仁（都留文科大学）



この度は、日本統計学会統計教育賞という名誉ある賞を授与して頂き、大変光栄に存じます。推薦して頂いた方、選考委員の方々に、心より御礼申し上げます。

私は、23年間数学教師として中学校の教壇に立っていました。当時、生徒が与えられた数学の問題を効率よく解けるようになること以上に、数学的に考えることや処理することのよさが伝わる授業を行いたいと模索していました。その中で、リアルデータに基づいて近未来を予測したり、何らかの意思決定を試みたりする授業に傾倒していったように思います。その際、同じデータであっても関数的にみることもあれば統計的手法を試みることもあり、領域、あるいは教科の枠を超えた学びの意義を考えるようになりました。振り返ると、私が中学校教員時代に取り組み、こだわっていたことがその後の私の取り組みに大きな影響を与えているものと思います。そのような経験を踏まえ、国や地方の教育行政に携わった後、大学の教壇に立つようになり、現在8年目となりました。多くの学生が卒業後に全国各地の教員になることを目指して学んでいる中で、統計的内容を学ぶことの意義や価値を感じているように思います。それは、多様なビッグデータが溢れるように偏在し、ICTやAIが発達している現代社会において、データといかに向き合い、対応し、使いこなすかということは、今後欠かすことのないリテラシーだと感じているからだと思います。加えて、教員にならない学生、文化系の学生も同様に感じているようです。そういった意味でも、統計教育は益々の充実が求められ、期待されるものと思います。

統計的探究には、データを鵜呑みにしない、導いた結論とは別の側面から見直すなど、批判的思考が付きまとうものです。そして、批判的に考察することによって新たな数学的手法に触れて学ん

だり、あるいは自らが新しい手法を考案したりすることもあるでしょう。つまり、日本では統計的内容が数学教育の中に位置付けられていますが、これには大きな意味があると思います。その一方で、教科の枠を超えてリアルデータと向き合い、目的を果たすためにあらゆる手法で分析を試みることもあります。恐らくそこには「問いの設定」が位置付き、最終的に「行動提案」が成されるもので、いわゆるデータサイエンスと言われる学問領域に踏み込んでいくものと考えます。今後、このような視点で私に何かできることはないかと考えているところであり、今回の受賞を機会に、非力ながら少しでもお役に立つことができれば、それがご恩返しになると思っています。

今回の受賞は、私に発表の機会を与えて下さった竹内光悦先生を始め、多くの方々から多大なるお力添えを頂いたことによります。ここに改めて心より感謝申し上げます。今後、魅力ある統計教育、データサイエンス教育を目指し、教材開発や授業づくりなどに取り組み、教育現場に寄与できるよう努力して参ります。ありがとうございました。



授賞式の様子：左より、青嶋誠理事長、新井仁氏、独立行政法人統計センター 白川和佳子氏、狩野裕会長

2.5 第19回日本統計学会研究業績賞

受賞のことは

柳 貴英（京都大学）

このたびは大変名誉ある「日本統計学会研究業績賞」を賜りまして、誠に有難うございます。身



に余る光栄に存じます。審査・推薦いただいた方々、学生時代からご指導くださっている西山慶彦先生（京都大学経済研究所教授）、奥井亮先生（東京大学大学院経済学研究科教授）、

片山直也先生（関西大学経済学部教授）、日頃からお世話になっている共同研究者の皆さん、同僚の方々、学生の皆さん、家族に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

受賞の対象となった論文5本のうち3本は、星野匡郎さん（早稲田大学政治経済学部教授）との共著論文で、操作変数を用いた統計的因果推論に関する研究成果です。2023年に Journal of Econometrics (JoE) から出版された論文では、処置選択における内生性および主体間の相互依存性が疑われる状況のために、操作変数に依存する完備情報ゲームによって処置選択をモデル化することで、限界処置効果と呼ばれる因果効果パラメタを推論するための手法を提案しています。2022年に Journal of Causal Inference から出版された論文では、観測できない有限個の部分母集団によって母集団が構成される場合に、部分母集団ごとの限界処置効果を推論するために、操作変数法と有限混合モデルを組み合わせた統計的因果推論アプローチを提案しています。2024年に Journal of the American Statistical Association から出版された論文では、処置効果が社会ネットワークを介して複雑に広がる可能性がある、かつ、処置選択における不遵守が存在する状況において、直接効果・波及効果・総合効果にかかわる統計的因果推論を展開するための操作変数法を提案しています。これら一連の共同研究を進めることになったきっかけは、2017年に香港で開催された経済学の国際学会 Asian Meeting of the Econometric Society において、計量経済学における構造モデルと統計的因果推論を橋渡しする研究をできないか、と星野さんと話したことにありと記憶しています。それ以来、星野さんとは継続的に共同研究を進めることができ

ており、とても嬉しく思います。

受賞の対象となった他の論文2本は、奥井先生との共著論文で、データとしては観測できない異質性について推論するためのパネルデータ分析を提案したものです。2019年にJoEから出版された論文では、各個体の時系列平均・自己共分散・自己相関の分布を推論のターゲットと設定して、推定した時系列平均・自己共分散・自己相関の経験分布にもとづく推論を展開することで、観測できない異質性について調べるためのアプローチを提案しています。2020年にThe Econometrics Journal から出版された論文では、JoE論文を拡張する形として、観測できない異質性について推論するためのカーネル密度・分布推定を提案しています。これら2本の論文は、私が京都大学の大学院生だったときに奥井先生と一緒にスタートさせていただいた共同研究で、京都大学経済研究所の奥井先生の研究室で議論した日々を思い出します。これら2本の論文に限らず、奥井先生にはお会いするたびに数多くのことを学ばせてもらっています。

このとおり、私が今回「日本統計学会研究業績賞」を授与いただけたのは、共同研究者をはじめとする多くの方々のお力添えのおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。これからも研究活動に邁進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

受賞のことば

清水 泰隆（早稲田大学）



この度、日本統計学会研究業績賞という大変名誉ある賞を賜り、身に余る光栄に存じます。これまでの研究の歩みを振り返りますと、多くの先生方、共同研究者や学生など、多方面から学ぶ機会に恵まれ、そのご指導とご助言が私の学問的基盤を形作ってきたことを痛感いたします。とりわけ、学生時代に厳しく指導いただきながらも、常に深い慈悲をもって導いてくださった

東京大学の吉田朋広先生、そして学問的にも私的にも惜しみないご支援をくださった大阪大学の内田雅之先生、および同門の仲間の皆様には、心から感謝を捧げたいと思います。

私が保険数理のテーマを選ぶに至った道のりには運命的なものを感じます。私は学部卒業後、ある大手生命保険会社にアクチュアリー採用として入社しましたが、実務が肌に合わず、大学院で数理ファイナンスを学ぼうと早々に退社しました。大学院入学までの間、1対1でのセミナーに付き合ってくださいったのが恩師・吉田朋広先生でした。先生は、語るよりも沈黙をもって示唆を与えてくださる方です。ある等式を黒板に書いた際、「その一行に命かけられますか？」と問われ、私が答えに窮すると、分かるまで先生は沈黙のままにされました。しばらくして、なんとか説明できたとき「命をかけられないと数学で飯は食えませんよ」と言われました。この経験は私の研究姿勢に深く刻まれ、この世界で生きていく覚悟を育んでくださいました。

吉田先生に導かれ、私は徐々にファイナンスよりも統計学に傾いていきました。どんな確率モデルも、結局パラメータが決まらなければ絵に書いた餅。統計学は実務における最後の砦です。それで確率微分方程式の統計推測を研究するようになりました。そんな院生時代、東大本郷で毎週行われていた「統計学輪講」において、当時経済学部におられた国友直人先生が「破産理論」を紹介されました。当時流行していた数理ファイナンスとは似て非なる印象で、国内ではほとんど未開拓の分野でした。同時に、当時私が研究していた飛躍型拡散過程の推測論がダイレクトに応用できると直感しました。保険会社を退社した後「二度と保険はやるまい」と密かに思っていたのに、こんなところで再び保険と巡り合うとは... これは神様から頂いた御縁だと思い、この未開の地に参入したのです。

大阪大学の助教となった頃、カナダでの在外研究の機会を得ました。私は日本酒と刺し身をこよなく愛していたので外国に行くつもりは実はさら

さらなかったのですが、これには内田雅之先生の熱心な勧めとご助力があり、押し負けました。しかし、そのお陰で国際的な保険数理のネットワークを広げることができたのです。当時は破産確率からGerber-Shiu関数への拡張が始まった時期で議論が活発でした。私は国際会議にも盛んに出向き、破産計量の離散観測推測の必要性を説いて回りました。すると何人かの研究者から同調するメールが来るようになり、それが多くの共同研究につながりました。学問の広がりと同時に、人的つながりが新たな研究を切り拓くことを実感しました。

今回の受賞にはもう一つご縁を感じます。それは、私が初めて助手の職を得た研究室の「ぼす」（当時の呼び名です）であった狩野裕先生が今年学会長となられ、会長直々に賞を手渡しして頂けたことです。ぼすの下で培った経験と学びが、このたびの受賞として結実したことは誠に感慨深いものがあります。ぼすの研究室は、今も私の研究室づくりのお手本です。

統計学は時代の要請に応じて応用範囲を広げますが、その根底には理論の厳密さを追究する姿勢が不可欠です。本受賞を励みとし、今後も理論と応用の両面から統計学の発展に寄与するとともに、次世代の研究者の育成にも力を尽くす所存です。



授賞式の様子：左より、青嶋誠理事長、柳貴英氏、清水泰隆氏、狩野裕会長

2.6 第18回日本統計学会出版賞

受賞のことは

書籍名：この1冊ですべてわかるデータサイエンスの基本

編集者：滋賀大学データサイエンス学部

出版社：日本実業出版社

市川 治（滋賀大学）



この度、滋賀大学データサイエンス学部が編集した書籍『この1冊ですべてわかる データサイエンスの基本』（日本実業出版社）が、第18回日本統計学会出版賞という名誉ある賞を賜

りましたこと、誠に光栄に存じます。選考に関わられた日本統計学会の皆様、そして本書の制作に携わってくださったすべての関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

本書は、2022年4月に当時の学部長であった椎名洋先生の企画により始動し、椎名先生のリーダーシップのもと、学部全体のプロジェクトとして取り組まれました。執筆には、教員のみならず、卒業生・修了生・在学生が協力し、滋賀大学データサイエンス学部の教育成果と実践的な活動を一冊にまとめることができました。

第1章から第7章では、主に学部3年生以下が取り組んだ「手軽なデータ分析事例」を紹介し、第8章・第9章では、企業や自治体との連携活動から生まれた「本格的なデータ分析事例」を掲載しています。特に第1章は、学部1年生による課題解決型学習（PBL）演習授業の成果であり、和泉教員が担当したクラスでは、滋賀県大津市との連携授業を通じて、市役所の見学や職員の助言を取り入れながら、データ解析に基づく提案を行いました。

本書は、初学者にもわかりやすく、身近な事例を通じてデータサイエンスの基本を学べる構成となっており、教育現場における指導方法の共有や、高校・大学・社会人まで幅広い層への普及に貢献する内容として高く評価されました。文部科

学省の「数理・データサイエンス・AI教育強化」の拠点校としての本学の取り組みが、出版という形で社会に広く伝わったことは、教育・研究活動の成果として大変意義深いものです。

この出版にあたり、執筆に尽力いただいた教員の皆様、意欲的に取り組んでくれた学生の皆さん、そして編集・制作を支えてくださった日本実業出版社の皆様に、あらためて深く感謝申し上げます。皆様のご協力があったこそ、本書は学部の理念を体現する成果物となり、今回の受賞につながったものと確信しております。

滋賀大学データサイエンス学部は、統計学を基盤としたデータサイエンス教育を通じて、社会課題の解決に貢献できる人材の育成を今後も進めてまいります。今回の受賞を励みに、教育・研究のさらなる充実を図ってまいります。あらためまして、日本統計学会の皆様に深く感謝申し上げます。

受賞のことは

書籍名：統計学 One Point シリーズ

（既刊28巻、直近5年刊行第18巻～第28巻）

編集委員長：鎌倉 稔成（中央大学）

出版社：共立出版（共同受賞）

鎌倉 稔成（中央大学）



出版賞を賜るにあたり、関係各位の皆様に心より御礼申し上げます。

振り返れば、この出版企画に繋がったのは、私が日本統計学会の理事長を務めていたころ（2013年6月～2015年6月）に遡ります。当時の理事会の重要な取り組みの一つとして、前理事長（岩崎学先生）から引き継いだ「統計学百科事典の翻訳」がありました。学会の若手研究者を含め多く

の研究者を巻き込み、基本的な統計用語を解説する用語辞典を翻訳し、学会全体として学問の啓蒙および研究基盤の整備に役立てようとするものでした。この作業には多大な時間と労力を要しましたが、完成を見たのは二代後の理事長である西郷浩先生の時代でした。

そのほかにも、学会が中心となって科研費の獲得や産学連携研究を進めることが重要な課題でした。ちょうど私が理事長を退任する時期に、共立出版から「統計学ワンポイントシリーズ」の編集を依頼されました。理事長を退任する立場で務まるのか伺ったところ、「ぜひに」ということでお引き受けすることとなりました。

当時すでに「数学ワンポイント叢書」があり、受験業界でも著名な矢野健太郎先生が編集されていることを存じていました。私自身も何冊か所蔵しており、矢野先生に憧れていたこともあって、この依頼を大変嬉しく思ったことを今でも覚えております。「数学ワンポイント叢書」は38タイトルと伺っていたため、編集会議では「100タイトルを目指そう」と掲げました。いまだ実現には至っておりませんが、38タイトルを超えることは目標としております。「数学ワンポイントシリーズ」に比べてやや難解との評価もありますが、統計学の専門書としての性格を考えるとやむを得ない面もあります。それでも可能な限り幅広い分野を取り上げ、若手研究者の学習や研究の一助となるように編集を進めてまいりたいと考えております。

最後に、出版という分野を通じて今後も日本統計学会に貢献できればと願いつつ、改めて深く感謝の意を表します。

菅沼正裕（共立出版株式会社）

このような大変名誉ある賞を頂戴することになり、大変光栄に存じます。この受賞に際し、ご推薦いただいた先生方、ご選考に携わられた先生方に心より感謝申し上げます。

今回の受賞は直近5年間の18巻以降の受賞となっておりますが、この受賞にはこれまでのすべ

での巻に対して頂いたものと認識しております。これまでご尽力いただきました鎌倉先生をはじめとする編集委員11名の先生方、そして40名の著者の先生方、また原稿を閲読いただきました総勢56名の先生方に改めまして御礼申し上げます。それぞれユニークに数えますと総勢63名の先生方にお力添えいただいたことになります。おそらくそれぞれの原稿について、完成前に読んでいただいたり、コメントいただいたり、ご相談にに応じていただいたりした方も多くおられますので、これまで関わっていただいたすべての方に感謝申し上げます。

「統計学 One Point シリーズ」には、企画の参考としましたシリーズがあります。1976年から1982年にかけて全37巻刊行いたしました「数学ワンポイント双書」シリーズで、『インプシロン・デルタ』や『平均値の定理』、『無限集合』など、大学に入学した学生が数学の講義でつまずきやすい題材をメインに、それぞれのポイントをやさしく解説する書籍シリーズです。

この「数学ワンポイント双書」をベースにし、統計学分野でも主要なテーマを初学者にもわかりやすく解説するシリーズとして2016年に出版を開始し、これまでに28巻刊行してまいりました。シリーズを立ち上げる前には、編集委員の先生方にお集まりいただき、企画の相談、執筆テーマおよび著者の選定などの会議を2015年に行っており、10年経った本年にこのような賞をいただき、大変光栄に感じております。付け加えますと、2015年に第8回日本統計学会出版賞をいただいております。その受賞により統計関連の書籍により一層力を注いできましたことが今回の受賞につながったとすれば、出版社として誠に喜びに堪えません。

この栄えある受賞は、本シリーズが、統計学を志す学生、統計手法を学び活用する実務家、さらには新たな研究分野を開拓すべく、日々励んでおられる研究者、大学教員の皆様の一助としてご活用いただき、評価いただいたものと信じております。また翻って、出版社として、これからも統計学徒、そして統計学分野の発展に貢献すべく責任

と使命を改めて感じております。

これからも、「統計学 One Point シリーズ」を多くの読者のお手元にお届けできるように、そして新たな書籍の出版に向けまして、励んでまいります。引き続きまして、何卒よろしくお願い申し上げます。



授賞式の様子：1枚目 左より、狩野裕会長、滋賀大学、
2枚目 左より、狩野裕会長、鎌倉稔成氏、共立出版

2.7 第39回小川研究奨励賞 受賞のことは

石原 卓弥（東北大学）



この度は日本統計学会小川研究奨励賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。選考委員会の先生方、推薦をしていただいた先生方に感謝申し上げます。加えて、共同研究者

の方々やこれまでお世話になった先生方にも改めて感謝申し上げます。特に、指導教官の下津克己先生には、修士課程から博士課程までご指導いただきました。心より御礼申し上げます。

今回の受賞対象となった4本の論文は、非分離的モデルの識別と推定、最適な処置選択方法の開発、ロバストな経験ベイズ法の開発という3つのテーマに関して得られた研究成果です。非分離的モデルについての2本の論文では、それぞれ操作変数とパネルデータが利用できる場合の非分離的モデルについて議論しました。1つ目の論文では、推定対象に単調性や凹性を仮定することで2値の操作変数がある場合の非分離的モデルが部分識別できることを示しました。この論文は私の修

士論文が基になっています。学部生のときは卒業論文が必須ではなかったため修士課程に入って初めて論文を書いたので、修士論文の執筆には非常に苦労しました。指導教官の下津先生に熱心に指導をしていただいたおかげで、なんとか論文を完成させることができましたと思います。2つ目の非分離的モデルの論文では、パネルデータを用いた新しい2段階推定方法を開発し、その推定量の一致性と漸近正規性を示しました。また、提案した推定量を用いて、農業保険が農家の生産性に与える影響とテレビ視聴が子供の認知能力に与える影響についても分析しました。この論文も、学会やワークショップで多くの方からコメントをいただいたおかげで、より良いものにできたと思います。

博士課程3年のときに University College London に3か月間滞在する機会があり、当時 UCL に在籍していた北川透先生にお世話になりました。UCL での滞在中に処置選択という分野に興味をもち、北川先生と最適な処置選択方法に関する研究を始めました。今回の受賞対象となった処置選択に関する論文は、北川先生との共同研究の結果を拡張したものになります。この論文では、結果変数が2値の場合の処置選択問題をについて分析し、ミニマックスリグレット基準に基づく最適なバンド幅選択方法を提案しています。最後の経験ベイズ法に関する研究は、東京大学の栗栖大輔先生と慶應大学の菅澤翔之助先生との共同研究になります。この研究では、ロバスト性と効率性をバランスさせる γ -divergence を用いた新たな経験ベイズ法を提案しました。以前から東京大学経済学研究科の先輩である栗栖先生と菅澤先生と一緒に研究したいと思っていましたので、この研究に参加することができて本当に幸運でした。

これまではミクロ計量経済学という分野の理論研究を行ってきましたが、多くの方と共同研究を始めたことで、実証研究や計量経済学以外の統計研究など様々な分野の研究に興味をもつようになりました。この受賞を励みに今後も幅広い分野の研究を行っていきたいと思います。

受賞のことば

仲北 祥悟（東京大学）



この度は大変名誉ある賞を賜りまして、誠にありがとうございます。選考委員の先生方、ご推薦を賜りました先生方、博士課程での指導教員である内田雅之先生、そして現在所属しております

東京大学大学院総合文化研究科附属先進科学研究機構における上司であり共同研究者でもある今泉允聡先生に、ここに厚く御礼申し上げます。また、日頃より研究に関して議論に応じてくださる先生方や学会でご交流いただく先生方、大学のスタッフの皆様、学生の皆様をはじめ、多くの方々の励ましとご支援に支えられての成果であると存じ、心より感謝申し上げます。

今回評価していただいた研究は、確率過程の統計の中でも、高次元設定での推論や計算資源制約下での推論といった、理論・応用の両面から近年重要性を増している課題に挑戦したものです。その挑戦的な取り組みを評価いただいたものと考えております。特に、非スパース高次元確率過程に対する良性過適合の研究は、従来の低次元設定やスパース高次元設定における従属統計とは異なる構造を解明する端緒となると考えています。良性過適合とは、近年ニューラルネットの研究で発見された現象であり、訓練データのノイズまで学習するような過適合であっても高い予測性能を発揮する現象を指します。従来の統計的学習理論では説明が難しい現象であり、線形回帰や2値分類、2層ニューラルネット、確率的最適化など多方面から急速に研究が進められています。本研究では、観測間に従属構造が存在する過剰パラメータ設定（変数・パラメータがサンプル数を上回る状況）の線形回帰問題において、スパース性を仮定せず、しかも自己相関の減衰やミキシングが極めて遅い場合でも高い予測性能を持つ推定量が構成できることを示しました。これは良性過適合や学習理論の研究に新たな知見を与えるだけでなく、

従属統計の理論・方法にも新しい視点をもたらすものです。従来の従属統計の研究では、独立同分布の仮定に近づけるため高速な自己相関減衰や良好なミキシングを前提とすることが一般的でした。今回の研究は、そうした従来の低次元・スパース高次元設定とは大きく異なる構造のもとで、独立同分布の場合と同様の結果が得られることを明らかにしました。

今回の受賞を励みに、今後とも一層研究に邁進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

受賞のことば

奥戸 道子（東京大学）



このたびは日本統計学会小川研究奨励賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。ご推薦くださいました先生方をはじめ、選考にあたってくださった先生方、関係する皆様に心より

感謝申し上げます。またこれまでご指導くださった先生方、共同研究者の皆様に感謝申し上げます。特に、卒論時と博士課程でご指導いただき、東京大学で助教を務めていた間も大変お世話になった駒本文保先生には、この場を借りて深く感謝申し上げます。

私が統計学の勉強を始めたのは東京大学で計数工学科に進学し、卒業論文で統計の研究室に配属されたときでした。計数工学科では最適化・数値解析・離散数学などいろいろな数理科学の分野の勉強をする機会があり、統計の研究室でも幅広い数理の知見を活かして統計の研究が行われていたことが魅力的でした。その後、博士課程からベイズ統計や情報幾何の研究に従事しています。

私の研究は、ベイズ統計に現れる数値計算や、それに関わる情報幾何に基盤を置いています。受賞の対象となった論文のうち Okudo and Yano (2024) では、推定の問題における事後平均やMAP推定量の計算について、2つが漸近的にあるオー

ダーまで一致する事前分布のペアを求めました。MCMC の構成が困難なときにうまく別の事前分布を構成してその MAP 推定量で漸近的に事後平均を近似する、または MAP 推定のための最適化が困難なときに別の事前分布による事後平均で MAP 推定量を近似する手法を提案しました。ペアの事前分布の密度が満たす条件を導出し、情報幾何で α -平坦と呼ばれるクラスのモデルでは条件が簡単な形で書けることを示しました。Okudo and Komaki (2024) では、平均未知・分散共分散行列既知の多変量正規分布の予測分布の構成の問題に対して、分散共分散行列に対しても新たに推定量を構成することで、Jeffreys 事前分布にもとづくベイズ予測分布を改良する予測分布を正規分布の範囲で構成できることを示しました。この手法では Okudo and Komaki (2021) の結果を応用して、ベイズ予測分布を正規分布の空間に m -接続の意味で射影するというアイデアを用いました。

今回の受賞を励みに、今後も研究に邁進してまいります。これまでお世話になったすべての方々に改めて感謝申し上げます。

受賞のことは

藤森 洸 (信州大学)



この度は、小川研究奨励賞という栄誉ある賞を受賞し、大変光栄に存じます。推薦をしていただいた先生方ならびに選考委員会の先生方に、心より御礼申し上げます。また、これまでの研究活動においてご指導、ご助言を賜りました多くの先生方、共同研究者の先生方に、改めて深く感謝申し上げます。

特に、指導教員である早稲田大学の西山陽一先生には、長年にわたり熱心にご指導いただきました。私が数理統計学や確率過程の研究を始めるきっかけを与えてくださっただけでなく、研究者としての在り方をはじめ、多くの大切なことを学ばせていただきました。また、学生時代から早稲

田大学の谷口正信先生には、研究会やシンポジウムで発表や国際交流の機会を与えていただき、多くの貴重な経験を積むことができました。さらに、博士号取得後は早稲田大学の清水泰隆先生の研究室にて、日々のセミナーを通じてご助言をいただきました。先生方からいただいたご指導は、現在の私の研究活動の大きな支えとなっております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

今回受賞対象となった論文はいずれも、高次元の確率過程や時系列に対するスパース推定に関する研究です。拡散過程や Cox 回帰モデルに関する研究 (Fujimori, 2019; 2022) は、学生時代に受講した西山先生の講義内容を、高次元パラメータを有するモデルに拡張したものです。当時、拡散過程の統計モデルにおけるパラメータ推定を高頻度離散観測に基づいて高次元の枠組みで扱う試みはほとんど見られませんでした。指数型の集中不等式を用いることで推定量の誤差評価を行い、漸近挙動について考察しました。Cox 回帰モデルの研究においても類似する議論に基づき、回帰係数や累積ハザードの推定を高次元スパースの文脈に拡張しました。

一方、Fujimori et al. (2023) では、早稲田大学の谷口正信先生、劉言先生、九州大学の後藤佑一先生との共同研究として、高次元定常時系列の第一主成分に対するスパース推定について考察しました。独立同分布の場合に比べて解析上の工夫が求められるため、弱依存時系列に対する集中不等式を活用し、適当な条件の下で正則化推定量の誤差を評価することができました。この研究を通じて時系列解析の新しい視点を学ぶことができ、自身の研究の視野が大きく広がったことを実感しております。

現在は、これまでの研究をさらに発展させるべく、分散不均一性を有するモデルに対する統計推測を高次元の枠組みで考察する研究を進めております。高次元漸近理論に新たな視点をもたらす成果へとつなげることを目指すとともに、計数過程や整数値時系列への応用を視野に入れ、実データ

解析にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

本賞を励みとして、これまで以上に努力を重ね、受賞者の名に恥じぬ研究者となれるよう研鑽を積んでまいります。特に、確率過程や時系列解析を研究の軸に据え、一層の発展に貢献できるよう努めてまいります。今後ともご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



授賞式の様子：青嶋誠理事長，奥戸道子氏，仲北祥悟氏，狩野裕会長

2.8 第4回ISI 東京大会記念奨励賞

この賞について

樋口 知之（中央大学）

日本統計学会では、若手研究者の国際的な活動を支援することを目的として、ISI WSC (ISI World Statistics Congress) において研究発表を行う人を対象として、2019年から「ISI 東京大会記念奨励賞 (ISI Tokyo Memorial Award)」による表彰を行っています。この賞は、1987年に東京で開催された ISI WSC 1987を記念して創設されたものです。ISI WSC は2年毎に開催されており、本年は10月5日から9日までオランダ・ハーグで開催されました。5名の受賞者は、それぞれこの大会で研究成果を発表されました。受賞者の皆様の一層のご発展とご活躍をお祈りします。

この賞の募集は今後も2年ごとに行われる予定です。次回の ISI WSC (第66回) は2027年7月11日～15日に韓国・釜山で開催されます。この賞に関する今後のスケジュールは、ISI WSC の運営ス

ケジュールの不確定要因もあり現在未確定ですが、通例に従えば、2026年夏頃に募集開始となります。応募の要件は、2027年の ISI WSC において研究発表を行う若手研究者となります。詳細な募集要項は学会ホームページ等において公開されます。関心のある会員の方は奮ってご応募ください。

受賞のことは

佐川 凜華



この度は第4回 ISI 東京大会記念奨励賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。The 65th ISI World Statistics Congress 2025 における研究発表の演題は、

”An information criterion for

detecting periodicities in functional time series”であり、私が学部生の頃から取り組んできたテーマである関数時系列の周期性に関する研究です。

本発表では、関数時系列における調和関数モデルに対して、周期数を推定するための BIC 型の情報量規準と、最小二乗法で得られる残差を利用した逐次的なアルゴリズムを提案しました。さらに、提案手法における推定量の漸近的性質を理論的に明らかにし、太陽黒点データや日本・カナダ・オーストラリアの日次平均気温データを用いたデータ解析を通じて提案手法の実用性を検証しました。本研究の大きな特徴は、関数時系列にとどまらず多変量時系列にも適用可能であり、情報量規準におけるペナルティ係数の具体的な設定に依存することなく周期数を選択できる点にあります。さらに、多重検定問題を回避できるため、気象学や天文学をはじめとする幅広い分野での応用が期待されます。

このような国際会議において、研究発表する機会をいただいたこと、また多くの研究者と意見交換を行えたことは、今後の研究活動を進める上で大きな財産となりました。発表後の質疑応答や議論を通じて、自分の研究を客観的に見直すことも

に、新たな課題や展望を得ることができたことは大きな刺激となりました。一方で、国際的に研究成果を伝えるためには英語力が不可欠であることを強く実感し、現状では改善すべき点が多いことも痛感しました。今後は研究を深めることに加え、英語力の向上にも努め、国際的に成果を発信できる研究者を目指していきたいと考えております。

最後に、審査いただいた先生方ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。本研究を進めるにあたり、日頃よりご指導いただいている劉言先生や共同研究者の Valentin Patilea 先生、清水泰隆先生や西山陽一先生をはじめ、研究を支えてくださった先生方や家族、友人、そして劉研究室の皆様にも、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の受賞を励みに、今後も統計学の発展に貢献できるよう研究に一層精進してまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

受賞のことば

澤谷 一磨



この度は ISI 東京大会記念奨励賞を賜り、誠に光栄に存じます。選考に携わってくださった先生方、共同研究者である東京大学の今泉允聡先生及び一橋大学の植松良公先生、そして私の

研究活動を日頃からご支援いただいております多くの方々に、心より感謝申し上げます。

The 65th ISI World Statistics Congress 2025において発表させていただく研究 ”High-dimensional single-index models: link estimation and marginal inference” では、比例的漸近理論とセミパラメトリック統計学の交差領域に焦点を当てました。ここ数十年ほどで急速に発展を遂げてきた、サンプルサイズとパラメーター次元が同程度に大きい状況を近似する比例的漸近理論 (proportional

asymptotics) の適用領域は、主にパラメトリックな設定での「平均的な」推定量の分布的特徴付けに留まっていました。そこで本研究では、未知の方向ベクトルによる 1 次元縮約と未知の非線形変換の合成から入出力関係を記述するシングルインデックスモデルにおいて、二段階の推定手順を考慮することで非線形変換のノンパラメトリックな推定の方法と理論保証を与えました。また、係数推定量の「各座標での」漸近正規性を追加的に示したため、変数選択など新たなタスクへの応用を見据えています。今後はさらに、マルチインデックスモデルや深層ニューラルネットワークを含むより柔軟で実用的な研究成果の発展を目指しています。

本会議は、世界各国から第一線の研究者が集う場であり、自身の研究成果に対して厳しくも建設的なフィードバックをいただける、極めて貴重な機会と考えています。異分野の専門家との議論を通じて、新たなアイデアや研究上の視点を得られることを大いに期待しています。また、自分の発表を通じて、同じ問題意識を抱える研究者とのつながりを築き、今後の共同研究等の可能性を探ることも目標の一つです。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった選考委員の先生方、そして日頃らご指導いただいている皆様に改めて深く感謝申し上げます。国際会議での発表と交流を通じて得られる経験を、今後の研究活動に最大限活かし、学術的な成果へと結実させるよう努めてまいります。

受賞のことば

平木 大智



この度は、栄誉ある「第 4 回 ISI 東京大会記念奨励章」を賜り、大変光栄に存じます。選考委員会の先生方をはじめ、ご推薦くださいました先生方、そして関係者の皆様に心より厚く御

礼申し上げます。博士課程1年という早い段階でこのような賞を頂けたことは、望外の喜びであり、今後の研究活動への大きな励みとなります。

本研究は、私が修士論文として執筆したものです。指導教官である大森裕浩先生には、学部生の頃から今日に至るまで、研究の進め方はもちろん、論文執筆の細部にわたり、常に熱心かつ丁寧なご指導を賜りました。特に、本研究の根幹をなす混合正規分布近似に基づくアプローチは、先生が共同研究者と開発された既存の確率的ボラティリティモデルの推定手法 (Omori et al., 2007) がなければ着想を得ることはできませんでした。また、共著者であるワシントン大学のSiddhartha Chib先生には、研究の方向性について数多くの貴重なご助言をいただきました。お二人の先生方のご指導なくして本研究の完成はあり得ませんでした。この場を借りて、改めて深く感謝申し上げます。

受賞対象となった研究は、「Stochastic volatility in mean: Efficient analysis by a generalized mixture sampler」と題し、金融時系列分析で用いられるStochastic Volatility in Mean (SVM) モデルの効率的なベイズ推定法を提案したものです。SVMモデルは、金融資産のリスクプレミアムを分析する上で重要なモデルですが、MCMC法による推定、特に潜在変数のサンプリングが非効率になりやすいという課題を抱えていました。

この課題を解決するため、より単純なSVモデルでは、モデルを数学的に変形した際に現れる複雑な確率分布を、扱いやすい正規分布の集まり(混合正規分布)で巧みに近似する手法が知られています。この近似により、モデル全体が線形・ガウス状態空間モデルとみなせ、高速なアルゴリズムが適用できます。しかし、SVMモデルでは平均構造がより複雑なため、この既存の手法をそのまま適用することはできませんでした。本研究の貢献は、SVMモデルから現れる、より一層複雑な確率分布(非心カイ二乗分布の対数)に対して、新たに高精度な混合正規分布近似を開発した点にあります。この「一般化された混合サンプラー」により、SVMモデルにおいても潜在ボラ

ティリティ全体を一括で効率的にサンプリングする道を開きました。シミュレーション研究により、本手法が既存手法に比べて計算時間とサンプリング効率の両面で大幅に優れていることを示しました。

私が本研究テーマに取り組むきっかけとなったのは、修士課程での研究活動の中で、複雑に見えるモデルでも、その統計的・数学的構造を深く探求することで、効率的で精度の高い推定法を構築できる点に、統計モデリングの大きな魅力を感じたからです。今回の受賞を大きな励みとし、今後はレバレッジ効果を含むモデルの分析だけでなく、より複雑な構造を持つ多変量モデルへの拡張など、さらなる研究に邁進していく所存です。

最後に、日頃から切磋琢磨し、多くの刺激を与えてくれる研究室の皆様に心より感謝申し上げます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

受賞のことば

山崎 遼也



この度は、第4回ISI東京大会記念奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。賞の選考に携わっていただいた先生方と学会等でこれまでご指導ご鞭撻を賜りました先生方、学生時分の指導教員である京都大学の田中利幸先生には深く感謝を申し上げます。

65th ISI World Statistics Congressでは、“Ordinal Data and Tree-Based Methods”のセッションで“Mixture-Based Approximately Unimodal Likelihood Model for Ordinal Data”というタイトルで研究発表をいたします。

今回発表する研究成果は、以前に開発した順序回帰のための単峰尤度モデルを発展させたものです。単峰尤度モデルの研究では、背後にある目的変数が離散で自然な順序関係を持つような順序データでは、条件付き確率分布が目的変数のラベ

ル順序に関して単峰であることが多いと考え、それを実験的に検証し、モデルパラメータによらず条件付き確率分布の推定結果が単峰になるような(リンク関数の設計を工夫した)尤度モデルを開発しました。

しかし、多くの実順序データで説明変数の値によっては条件付き確率分布が厳密には単峰でないことがしばしばあるとも確認されており、本研究ではそれによって生じる単峰尤度モデルの推定バイアスを低減することを目指して新たな尤度モデルを開発しました。具体的には、多くの実順序データで条件付き確率分布が厳密には単峰でない説明変数の値においても単峰に近い傾向を示すことを確認し、単峰尤度モデルと制約なしの尤度モデル(例えば、多項ロジットモデル)の混合の形で、単峰もしくは単峰に近い条件付き確率分布のみを表現できるモデルとして近似的単峰尤度モデルと呼ぶモデルを開発し、その有効性を確認しました。近似的単峰尤度モデルは、特に訓練データ数が小さい場合にモデルの複雑度の低さから制約なしの尤度モデルよりも、またバイアス低減のために単峰尤度モデルよりも優れた予測性能を発揮したのだと考えられます。

多額の旅費助成にも感謝いたします。来たる65th ISI World Statistics Congressではしっかりと発表して参りたいと存じます。また、今回の受賞を励みに、より一層の研鑽を重ねて参る所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。

受賞のことは

屋良 淳朝



この度は、第4回 ISI 東京記念大会奨励賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。選考に関わってくださった全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。また、指導教官である大阪大学基礎工学研究科の寺田吉壱先生をはじめ

め、日頃から私の研究活動を支援してくださる関係者の方々に心より感謝申し上げます。

今回、オランダのハーグで行われる The 65th ISI World Statistics Congress では、「On maximum likelihood estimation of intensity function for Poisson process with deep learning」というタイトルで発表します。

本研究では、共変量によって駆動されるポアソン過程の強度関数のノンパラメトリック最尤推定量の分散を評価するオラクル不等式を示しました。強度関数の最尤推定の場合、通常の汎化誤差解析で評価される超過リスクは、真の強度関数と推定量の間のカルバック・ライブラー (KL) ダイバージェンスが登場し、これは容易に発散してしまうため上界の評価が困難であるという問題があります。そのため、汎化誤差解析は真の強度関数が「Bounded away from zero である」などの構造的な制約を課して行われることが多いですが、本研究では KL ダイバージェンスの代わりにヘリンジャー距離を評価することによって、マイルドな仮定の下でオラクル不等式を導出しました。また、オラクル不等式を応用し、真の強度関数が①合成関数の構造を持つ場合、②低次元リーマン多様体上に台を持つ場合の2つの状況において、深層学習を用いた強度関数の最尤推定量の収束レートを導出しました。この結果から、ポアソン過程の強度関数の推定において、深層学習が次元の呪いを回避できること、低次元多様体の構造に自動的に適応できることが示されました。さらに、真の強度関数が合成関数の構造を持つ場合においてミニマックス下界を導出し、それが収束レートと対数因子を除いて一致することから、深層学習を用いた最尤推定量がほとんどミニマックス最適な収束レートを達成することを示しました。そして、数値実験においても、深層学習がカーネル型の推定量を優越することを確認しました。

今回の受賞を励みに、より一層研究活動に励んでいく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



授賞式の様子：青嶋誠理事長，山崎遼也氏，澤谷一磨氏，佐川凜華氏，屋良淳朝氏，平木大智氏，狩野裕会長

3. 第8回細谷賞の公募

松田 安昌（東北大学）

東北大学大学院経済学研究科では，細谷雄三名誉教授の統計学界における教育・研究への貢献を記念して，広く人文・社会科学分野における若手研究者のデータ科学研究を奨励するため，細谷賞を創設しました．このたび第8回細谷賞の公募を開始いたします．本賞は，東北大学須永特定基金より寄付を受け日本統計学会の後援により実施するもので，受賞者には研究奨励金（10万円）を授与します．人文・社会科学におけるデータ科学の理論および応用研究に努める多くの若手研究者の応募を期待しています．

1. 応募資格

- (1) 過去3年程度以内に，国内外の学術誌に掲載された人文・社会科学分野におけるデータ科学（統計分析・計量経済分析を含む）に関連する論文（単・共著ともに可）の著者であること
- (2) 論文出版時点において40歳未満の者
- (3) (1)，(2)の条件をみたす著者による連名の応募も可

2. 応募期限 2026年3月31日必着

3. 応募書類

- (1) 申込用紙
(<https://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/hosoyaappli.html>) よりダウンロード
- (2) 審査対象とする論文1編

4. 送付／問合せ先

応募書類をPDFファイルにまとめてEmailにて下記宛に送付のこと

dssr-sec@grp.tohoku.ac.jp

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

東北大学大学院経済学研究科サービス・データ科学研究センター

<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/>

5. 発表の通知 2026年6月（予定）

11月（予定）に受賞者を東北大学に招待し，表彰式およびHosoya Prize Lectureを行います．

4. 理事会・委員会報告（2025年7月26日開催）

一般社団法人 日本統計学会 理事会

日時：2025年7月26日（土曜日）午後1時00分～午後1時21分

場所：筑波大学 自然系学系棟 D802

オンライン理事会として実施

Zoom（ミーティング ID: 898 0990 6127）

理事の総数 14名 出席理事の数 13名

監事の総数 3名 出席監事の数 3名

出席者：

理事：狩野裕会長，青嶋誠理事長，坂田綾香（庶務），明石郁哉（庶務），白石博（会計），増田弘毅（JJSD），荒木由布子（会誌編集和文），朝日弓未（広報），寺田吉壺（大会／企画・行事），清智也（国際），長尾大道（渉外），瀬尾隆（渉外），竹内光悦（教育）（以上13名，括弧内は役割分担）

監事：照井伸彦，川崎能典，山下智志

第1議案 常設委員会における委員の追加について

青嶋理事長より，資料に基づき，常設委員会における委員の追加が提案され，審議の結果，承認が得られた。

学会活動特別委員会

富田誠委員，岩崎学委員，大草孝介委員，狩野裕委員，鎌谷研吾委員，高部勲委員，竹内光悦委員，榎田直木委員，矢田和善委員を追加した。（2025年7月26日付）

学会組織特別委員会

青嶋誠委員，荒木由布子委員，鎌倉稔成委員，川崎能典委員，栗原考次委員，竹村彰通委員，岩佐哲也委員，山本義郎委員を追加した。（2025年7月26日付）

第2議案 常設委員会における委員の再任について

青嶋理事長より，資料に基づき，常設委員会におけ

る委員の再任が提案され，審議の結果，承認が得られた。

学会活動特別委員会

赤谷俊彦委員，足立浩平委員，椿広計委員，樋口知之委員，廣瀬慧委員，南美穂子委員，渡辺美智子委員を再任した。（2025年7月26日付）

学会組織特別委員会

會田雅人委員，大森裕浩委員，川野秀一委員，酒折文武委員，清水誠委員，瀬尾隆委員，田畑耕治委員，山下智志委員，美添泰人委員を再任した。（2025年7月26日付）

第3議案 公益財団法人矢野恒太記念会の賛助会員について

青嶋理事長より，資料に基づき，公益財団法人矢野恒太記念会の賛助会員入会について提案がなされ，審議の結果，承認が得られた。

第4議案 JJSD担当理事の辞任の申し出について

青嶋理事長より，JJSDの第二期の終了に伴い，増田JJSD理事の辞任予定について報告がなされた。9月中にJJSD理事の交代に関する臨時社員総会を行うことの提案があり，審議の結果，承認が得られた。

第5議案 会員の入退会

青嶋理事長より，回収資料に基づき，入退会希望者を紹介し，審議の結果，承認が得られた。

一般社団法人 日本統計学会 委員会

日時：2025年7月26日（土曜日）午後1時22分～午後2時36分

場所：筑波大学 自然系学系棟D802

オンライン委員会として実施

Zoom（ミーティング ID: 898 0990 6127）

出席：理事13名，監事3名，委員0名，計16名
狩野裕会長，青嶋誠理事長，坂田綾香，明石郁哉，
白石博，増田弘毅，荒木由布子，朝日弓未，寺田吉
壺，清智也，長尾大道，瀬尾隆，竹内光悦，照井伸
彦（監事），川崎能典（監事），山下智志（監事）

＜報告事項＞

1. JJSD 支援委員会

増田委員長より，資料を用いて JJSD の出版契約補遺（刊行回数変更）への電子署名対応について報告がなされた。また JJSD 支援委員長の交代後の，JJSD 支援委員会及び編集委員の新体制への移行についての報告がなされた。

2. 和文誌編集委員会

荒木委員長より，和文誌第55巻の編集状況について報告がなされた。

3. 大会委員会

寺田委員長より，2025年度統計関連学会連合大会の準備状況について報告がなされた。

4. 企画・行事委員会

寺田委員長より，第20回日本統計学会春季集会の準備計画について報告がなされた。

5. 庶務委員会

坂田委員長より，資料に基づき，2025年度統計関連学会連合大会における企画セッションについて報告がなされた。また，下記2点の後援を承諾した旨，報告がなされた。

(1) 国際ベイズ分析学会 2026 年世界大会実行委員会

主催：統計数理研究所・国際ベイズ分析学会

(2) 日本学術会議公開シンポジウム

『AI 時代における統計科学・データサイエンスの役割と挑戦 --- 公平性，信頼性，解釈可能性，AI ガバナンスの観点から』

主催：日本学術会議数理科学委員会数理統計学分会，数理科学委員会数学教育分会，数理科学委員会数学科分会，情報学委員会情報学教育分会

さらに，理事・代議員メーリングリストの運用に関する変更点について報告がなされた。

6. 広報委員会

朝日委員長より，会報（204号）の準備状況について

順調に進んでいる旨，報告がなされた。また統計学会ウェブページの更新状況および今後の運用方針についての報告がなされた。さらに今後の学生会員増加と，メーリングリストの活用に向けた提案がなされた。

7. 国際関係委員会

江村委員長の代理で清委員より，春季集会での基調講演の準備状況について報告がなされた。

8. 渉外委員会

長尾委員長より，研究成果公開促進費（国際情報発信強化 B）の状況について報告がなされた。

9. 質保証委員会

瀬尾委員長より，第1回統計検定文部科学大臣賞表彰式についての報告がなされた。

10. 統計教育委員会

竹内委員長より，統計教育分科会とスポーツデータサイエンス分科会と連携し，中高生スポーツデータ解析コンペティションの2025年度のエントリーを開始した旨が報告された。

11. I S I 東京大会記念基金運営委員会

樋口委員長の代理で，青嶋委員長より報告事項なしとの説明がなされた。

12. その他

坂田庶務委員長より，資料を用いて2024年度統計教育連携ネットワーク（JINSE）の中間報告および活動報告について説明がなされた。

＜審議事項＞

1. JJSD 支援委員会

審議事項なし

2. 和文誌編集委員会

審議事項なし

3. 大会委員会

審議事項なし

4. 企画・行事委員会

審議事項なし

5. 庶務委員会

審議事項なし

6. 広報委員会

審議事項なし

7. 国際関係委員会

審議事項なし

8. 渉外委員会

審議事項なし

9. 質保証委員会

審議事項なし

10. 統計教育委員会

審議事項なし

11. ISI 東京大会記念基金運営委員会

審議事項なし

12. その他

審議事項なし

<今後の予定>

2025年 9月 7日 (日) 19:00-20:30 (予定) 役員・
代議員協議会

2025年10月18日 (土) 13:00 理事会

2025年11月 日本統計学会春季集会準備会議

2026年 2月 8日 (日) 13:00 理事会

2026年 3月 6日 (金) 18:00 社員懇談会

2026年 5月 9日 (土) 13:00 理事会

5. 2025年役員・代議員協議会記録

日時: 2025年 9月 7日 (日) 午後 7時00分～午後 8時
18分

場所: 筑波大学 自然系学系棟 D802

オンライン協議会として実施

Zoom (ミーティング ID: 856 5984 3382)

参加人数: 34名

議題

1. 会長挨拶
2. 理事および委員の交代について
3. 連合大会中の日本統計学会関連セッションについ

て

4. 7月26日理事会について

5. JJSD 刊行回数変更と編集委員新体制への移行につ
いて

6. 第20回春季集会について

7. 科学研究費について

8. 統計検定について

9. その他 (質疑応答, 情報提供等)

・ ISI 東京大会記念基金運営委員会について

・ 今後の予定

6. 博士論文・修士論文の紹介

最近の博士論文・修士論文を紹介いたします。

(1)氏名 (2)学位の名称 (3)取得大学 (4)論文題
名 (5)主査または指導教員 (6)取得年月の順に掲
載いたします。

博士論文

- (1)岡田悠希 (2)博士 (理学) (3) 神戸大学
(4)Statistical hypothesis test for some coefficients of

the linear discriminant function with two-step
monotone missingdata (5)首藤信通 (6)2025年 3月

修士論文

- (1)瀧本寿輝 (2)修士 (理学) (3) 神戸大学
(4)Testing equality of mean vectors for the multivariate
Behrens-Fisher problem (5)首藤信通 (6)2025年 3
月

7. JSS Research Series in Statistics からの新刊情報

日本統計学会編の書籍シリーズ JSS Research Series in Statistics からの新刊情報を掲載します。

- ・題名：Asymptotic Expansion and Weak Approximation: Applications of Malliavin Calculus and Deep Learning
- ・著者名：高橋明彦，山田俊皓
- ・出版社：Springer

- ・出版年月：2025年10月
- ・価格：冊子体：49.99ユーロ
- ・紹介文：本書は，読者各自がその目的に応じた数値計算法を開発できることを企図し，マリアバン解析による漸近展開法，確率微分方程式の弱近似法及び深層学習を用いた確率数値解析法について解説したものである。

8. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2025年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上，こちらもご活用下さい。また，クレジットカードでの学会費払込も受け付けております。お申込みは学会ホームページよりお願いいたします。（<https://www.jss.gr.jp/fee/>）。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに，氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6
能楽書林ビル5F
公益財団法人統計情報研究開発センター内
日本統計学会担当
Tel & Fax : 03-3234-7738
E-mail : shom@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し，御冥福をお祈り申し上げます。

小泉 信子 会員
畠中 賢治 会員

入会承認

高橋直明，畑知宏，古居初音，HO KA LONG KEITH，公益財団法人矢野恒太記念会（敬称略）

退会承認

齊藤慎，花立修平，廣田正之，吉門孝司（敬称略）

現在の会員数（2025年9月30日）

名誉会員	12名
正会員	1,343名
準会員	5名
学生会員	66名
総計	1,426名
賛助会員	18法人
団体会員	7団体

9. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

- 来日統計学者の紹介
訪問者の略歴，滞在期間，滞在先，世話人などをお知らせください。
- 博士論文・修士論文の紹介
(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月をお知らせください。

求人案内（教員公募など）

- 研究集会案内
- 新刊紹介
著者名，書名，出版社，税込価格，出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし，主観的な表現は避けてください。
- 会員活動紹介（叙勲・受章，各種受賞等）
できるだけe-mailによる投稿，もしくは，文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先：

〒102-0071

東京都千代田区富士見 1 丁目11番2号

東京理科大学経営学部経営学科内

朝日 弓未 宛

E-mail: koho@jss.gr.jp

（統計学会広報連絡用e-mailアドレス）

- 統計学会ホームページ URL：
<https://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL：
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL：
<https://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス：
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス：
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス：
shom@jss.gr.jp